

古代の装身具

―発掘された宝石たち―

人はいろいろな素材を用いてアクセサリを作り、身を装ってさまざまな思いを表現しています。いつの頃から、どうして身を飾り、何を主張しようとしたのでしょうか。

身近な色を飾り安らぎを得る

高島市内で出土した最古の玉は、今津町の北仰西海道遺跡から出土した縄文時代晩期(約3千年前)の緑色のヒスイの丸玉で、当時としては絶対的な硬さとそれを加工する技術、産地がごく一部に限られるという希少性に価値があったと考えられます。

弥生時代以降になると碧玉や緑色凝灰岩製の細長い円筒形の「管玉」や、青色のガラス製の小玉が作られるようになります。いずれも緑や青を基調とし、緑は自然の象徴であり、生命力や安心・恒常を連想させ、安らぎ・癒しの色であることは現代を生きる私たちにも共通した感覚といえます。青は空・海・水に代表され、緑と並んでとても身近な色で、物質的

には希少性が高く、色も非現実的で神秘的と言えます。管玉は、佐渡や北陸・山陰など日本海側が石材産地ですが、弥生時代中期には市内の拠点集落である先述の北仰西海道遺跡や新旭町熊野本遺跡、安曇川町南市東遺跡から原石の破片や玉砥石等の玉造り関連遺物が出土していることから、原石を移入して、市内でも管玉の製作



〔新旭町〕熊野本遺跡弥生墳丘墓から出土したガラス製小玉

が行われていたことが分かっています。ガラス玉は、熊野本弥生墳丘墓の木棺内から741個の青色のガラス小玉が出土しているのはじめ、市内の古墳などから数点から数十点単位で発見されることによくあります。

復活と再生を願う勾玉

古墳時代になると社会の仕組みが大きく変化し、それに伴い玉の材質と色にも変化が起きます。緑のヒスイ・碧玉に、赤のメノウ、白・透明の水晶の素材が加わります。赤は血や太陽の色で、復活・再生を意味し、縄文時代以降、漆製品や赤色顔料にも多用されています。緑青を基調としていた連珠のなかに赤い玉が加わることは、癒し沈静の装身具である玉が首長の靈魂を復活・再生させる意味も持っていたと考えられます。

勾玉は三種の神器の1つに数えられるように王権の象徴とされるもので、市内の古墳ではメノウ製勾玉がマキノ町齊頼塚古墳から1点、ヒスイ製勾玉は今津町妙見山古墳40号墳から3点、安曇川町上御殿遺跡の木棺墓から1点ガラス玉などと共に発見され

ているだけです。

「玉」は「魂」に通じる言葉で、古代においては呪術的な意味のシンボルとして広く普及していったと考えられています。

今津図書館ではこれらの資料をエントランス展示「古代の装身具―発掘された宝石たち―」として9月29日まで開催しています。



〔マキノ町〕齊頼塚古墳から出土したメノウ製勾玉

文化財課
☎(32) 4467

編集感

読書、食欲、睡眠…たくさんのお名前を持つ「秋」が近づいてきました。その中でも9月は市内の各小中学校や保育園・幼稚園で運動会が行われる時期です。「運動の秋」の先駆けとして、いろんな地域から子どもたちの元気な声が聞こえてきそうですね。それに加え、9月は台風の時期でもあります。今回の特集では、災害時の備えや役立つ情報をまとめた「高島市総合防災マップ」を取り上げています。ぜひご確認ください(M)

広報たかしま

平成27年

9

月号 No.188

発行▼高島市 編集▼政策部秘書広報課
〒160-0001 東京都千代田区千代田1-1-1
滋賀県高島市新旭町北畑ののの畠地

☎0740(25)8000(代)
http://www.city.takashima.lg.jp
t:info@city.takashima.lg.jp

